

南山大学人類学博物館所蔵の「考古学研究の研究」に関する資料のアーカイブ化に向けて 附・第一展示室展示アルバム作成メモ追記

吉田 泰幸

はじめに

2007年に刊行された『伊藤秋男先生古稀記念論集』に所収されている「中山英司と愛知の遺跡」(安藤・松原・伊藤 2007)は、南山大学人類学民族学研究所の活動記録でもあり、中山英司先生の吉胡貝塚調査時の野帳など、大変貴重な資料を収録している。その文末に伊藤秋男先生自らが、そうした貴重な資料群の入手経緯を記している。

「私が昭和44年(1969)南山大学に職を得て入った研究室が、私と入れ代わりに青山学院大学に移籍された吉田章一郎先生の部屋で、そこに無造作に残されていたのが、これらの貴重な資料である。別領域の先生が研究室の主となっていたら、ゴミとして捨てられる運命にあったかも知れない」(同:534頁)

この一節は、見る人が違えば「ゴミ」も「貴重な資料」になり、その逆もあるという、アーカイブ、ひいては博物館その他個人蔵までをも含めた、モノのコレクション全体の本質に根ざしたものに感じられる。こうした考古学史研究を彩る貴重な資料の「危機」は、そこかしこでおこっており、やもすると実際に消滅の憂き目にあっていることも予想される。

南山大学人類学博物館にも、「主に考古学資料の書類等が収められている棚(木製)」の存在が新旧スタッフ間の引き継ぎ

事項に含まれていたが、その記述からは扱いに窮していることがうかがわれ、事実ほとんど手をつけられていない状態であった。頻繁なスタッフ交代のうちに、記憶の風化が進行しかねないことを鑑みれば、これらも潜在的な「危機」に瀕していたとも言える。事務的な必要上から、筆者が2008年夏にこれらの内容の簡単な調査をおこなう機会があったが、その精査は懸案事項であった。

しかし、早川正一南山大学名誉教授が、これらの資料群に記された研究者名として数多く登場していることから、これらの資料についてうかがったところ、早川先生も、その扱いについては「懸案事項」である旨を述べられた。そのため、2009年1月28日に各資料についての短いインタビューをおこなった。その結果、資料群の来歴や詳細な内容について、当時を知る由もない者には、新たに判明したことが非常に多かった。本稿はその結果をふまえ、これらの資料群のアーカイブ化を目指した予備調査報告という形をとる。前記の「主に考古学資料の書類等が収められている棚(木製)」全てを整理しきれた訳ではなく、個々の資料の精査は相変わらず課題として残っているが、今後、これらの資料群に期待される活用形態を先に述べれば、例えば以下のようなものが挙げられ、これらは互いに関連し合うものと考えている。

- a) 当館所蔵資料の周辺情報を充実させる。
当館所蔵・展示の考古資料は来歴に関する周辺情報が少ないものが多い。本稿であつかうような記録類の整理は、展示へのフィードバックも期待できるであろう。
- b) 東海地方における、現在は消滅してしまった諸遺跡の周辺情報を充実させる。
写真資料が多く含まれており、遺跡の調査当時の景観等、報告書には所収しきれなかった情報を引き出すことが期待される。
- c) いわゆる「研究の研究」の進展に寄与する。
本資料群からは、具体的には南山大学における考古学・人類学史研究、東海地方における考古学史研究に寄与することが期待される。

考古学では以前から「学史研究」というサブテーマにおいて、研究黎明・発展期の記録類に対する関心は高かった。近年では板橋区郷土資料館にて開催された『夢を掘った少年たち』（守屋編 2005）にみるように、これが博物館の展示活動にまで昇華する例もある。今後、同様の活動の機運が東海地方で高まることも予想される。その際に、これらの資料の貸出などによるコミュニケーションの生成が、研究の活性化につながる可能性もある。

早川正一先生によれば、本稿で紹介する資料が収められていた木棚は、旧人類学民族学研究所1階の事務室にあり、中山英司先生の考古学・形質人類学に関わる資料が収納されていたもの、とのことである。そ

うした木棚に収められていた資料群の大半は、ひとまずそれらの記録を残したと考えられる主体の差異をもとに、分類することができ（このこと自体再検討が必要かもしれないが）、以下のようなになる。

1. 人類学民族学研究所の調査・研究活動に関する資料、陳列室の解説パネル類、事務書類
2. 1955年に南山大学で開催された「連合大会」に関する資料
3. 人類学考古学研究会の調査・研究などの活動に関する資料
4. 文化人類学研究会の活動に関する資料
5. 南山大学の研究者が中心となっておこなわれた発掘調査に関する資料

これらが当館に残されていた詳しい経緯は別個の検討課題としてあるが、こうした簡単な分類からうかがわれることとして、これらの資料群は、現存しない組織が残した記録が大半である点と、大学としての研究活動以外の、同人的研究活動の記録も有している点が大きな特徴と言える。

もうひとつの特徴は、ネガフィルム・ガラス乾板・プリント等の形態の写真資料が多く含まれていたが、それらのほとんどは早川正一先生の撮影によるもの、ということである。これらをもとに、さらなるインタビューをおこなうことにより、短期間で多くの知見を得ることが期待できる。

以下、上記の分類をさらに細分した上で、それぞれの資料の概略を述べるが、記述は記録に記された年代順になっているわけでない。記述中、「・・・とのこと」、という伝聞表現を多用しているが、これらは早川先生から、インタビュー中に得られた情報であることを明記する必要上からで

ある。また、番号は本稿中での便宜的なもので、当館における資料番号を示している訳ではない。標題にもあるとおり、これらはアーカイブ「化」の途上にあるからである。

1. 人類学民族学研究所の調査・研究活動に関する資料、陳列室の解説パネル類、事務書類（写真1）

1-1：『石器時代遺跡地名表』（写真1-1）

おそらく「人類学民族学研究所」の活動の所産であろう、とのこと。上述の「中山英司と愛知の遺跡」（安藤・松原・伊藤2007）の参考文献中、「伊奈森太郎（年不詳）『石器時代遺跡地名表』（未発表）」というものがあり、これと同一のものかもしれない。わら半紙にペン書きされており、かなりの枚数がある。確認できた限りでは、愛知県内の遺跡地名表になっている。「所在地」、「遺跡」、「時代」、「遺物」、「所蔵者」、「文献」、「備考（面積現状等）」の項目がみられる。

1-2：『地方雑誌誌代送付表』など、図書購入に関係したと考えられる事務書類（同2）

「人類学民族学研究所」の名の入った便せん数枚に及ぶ。筆跡は稲垣晋也氏のものに思われる、とのこと。『両毛古代文化』、『上代文化』、『若木考古』などの誌名がみられる。

1-3：『行事予定表 人類学民族学研究所』（同3）

「人類学民族学研究所」の名の入った便

せん2枚。何年かは分からないが、7月のものと8月のものがある。愛知・三重・長野県への遺跡見学の予定が記されている。筆跡は稲垣晋也氏のものに思われる、とのこと。

1-4：『考古学関係郷土誌、学校刊行物、研究会報告 目録』（同4）

「人類学民族学研究所」の名の入った便せん数枚に及ぶ。研究所が所蔵していた考古学関係図書・雑誌の目録。筆跡は稲垣晋也氏のものに思われる、とのこと。

1-5：考古資料の手書き解説文（同5）

いずれも当時「人類学民族学研究所」に図工として勤務していた辻 元一氏の手によるものとみて間違いのない、とのこと。同様の筆跡で数枚あり、掲示されていた痕跡もみうけられる。現在でも当館展示考古資料の中で中心的な位置を占める愛知県入海貝塚、清水貝塚、白山藪古墳のものなど。辻 元一氏は『愛知県一宮市萩原町の弥生時代遺跡』（吉田編1960）などにおいて、土器実測図の作図者として紹介されているが、研究所の陳列施設の展示活動にも多大な貢献をしていたようである。

1-6：「杉山美代吉」氏から「伊奈森太郎」氏への書簡（同6）

内容は郷土誌原稿の青焼きのようであるが、詳細は不明。

1-7：『入海貝塚実測図』（同7）

愛知県知多郡東浦町文化財保存会編『入海貝塚』中、第二一図のものと同じのトレース図。稲垣晋也氏の手によるものであ

ろう、とのこと。

1-8：吉胡貝塚第二トレンチ平面図（同8）
カラーのトレンチ平面図。他に元図があり、それを写したものと思われるが、こうした仕事は上述の辻 元一氏によるものであろう、とのこと。

1-9：陳列室に掲示されていたと考えられる解説文（同9）

特徴ある辻 元一氏の字体と、写真の組み合わせで構成されたものが多い。テーマは「シナントロプス頭蓋骨」、「葬制の変遷」、「吉胡貝塚発掘調査」、「石鏃の刺さった人の脊椎骨」、「日本全図：先史時代遺跡・青銅器出土地」がある。

2. 1955年に南山大学で開催された「第十回日本人類学会日本民族学協会連合大会」に関する資料（写真2）

2-1：「三重 堀田吉雄殿」と宛名のある封筒（写真2-1）

差出人名は「第十回日本人類学会日本民族学協会連合大会」（スタンプ印）となっている。1955年におこなわれた同大会の事務書類であろう。最終的に堀田氏の手には渡らなかったもので、残されているのであろう。堀田吉雄氏は当時・三重県在住の民俗学者。

2-2：領収書（同2）

日付が「昭和30年」（1955年）、但し書きに「学会宿泊費内金」とあることから、「連合大会」に関連した事務書類であると考えられる。

2-3：第十回日本人類学会日本民族学協会連合大会出席者名簿（同3）

後述する「4-8：岐阜県武儀郡武儀村八幡遺跡発掘調査関連書類」中に、裏紙として利用されていたもの。大会に際しての事務書類と考えられる。

3. 人類学考古学研究会の調査・研究などの活動に関する資料（写真3）

3-1：フォトアルバム（写真3-1）

このアルバムの中に含まれている、伊藤秋男先生の若き日の写真は、星城大学の松原隆治氏より伊藤先生のご稀記念行事に際して貸出希望があり、貸出ししている。

収められている写真のほとんどは早川先生の撮影による。主として、当時助手であった稲垣晋也氏（人類学科の1期生で、のちに奈良文化財研究所へ赴任）を中心とする「人類学考古学研究会」のフィールドワークの様子を写したもの、とのこと。名古屋市瑞穂遺跡や、同南区の諸遺跡を巡った際の写真がおさめられている。現存しない瑞穂区丸山町丸山荘でのすきやきパーティの様子など、活発な活動がうかがわれるものが多い。その他、上智大学との交流行事の際の集合写真などがみられた。

3-2：『研究会帳 先史部門』（同2）

「人類学考古学研究会」には言語・民族・先史の3つの部門があり、そのうちの先史部門の活動記録。内容は「中山先生講演」と題したメモのほか、特筆すべきは「南山大学前窯跡発掘」とした発掘調査記録が数頁にわたっていることである。当館展示資料中に「南山教会古窯」とされた資

料が数点あるからである。何年かはうかがいしれないが、8月に発掘調査をおこなったようである。

3-3：『人類学研究会記録帳』南山大学人類学科（同3）

昭和38年度役員の名がある。同年度の活動記録を記したものの。このときはすでに後述する「文化人類学研究会」か？

3-4：『地図 研究会用』（同4）

「昭和29年3月現在 愛知県守山市志段見地区図」や、長野県内の5万分の1の地形図数枚。それぞれに「南山大学人類学考古学研究会」のスタンプ印がみられる。

3-5：『考古学研究会日誌 I 1962年度』（同5）

内容は勉強会のメモ、発掘調査の計画など多岐にわたっている。

3-6：出納帳（同6）

昭和31年度の研究会の出納帳。筆跡は稲垣晋也氏のものに思われる、とのこと。

3-7：「藤森栄一氏蔵庄ノ畑遺跡出土」とのメモがある土器断面図（同7）

メモ書きは1枚にしかないが、同様の土器断面図が数枚あり、一連のものと考えられる。人類学考古学研究会の行事で長野県に旅行した際、当時旅館を経営していた藤森栄一氏にお世話になり、そのときのものではないか、とのこと。

3-8：「昭和三十一年五月十日（木）瑞穂区一帯の遺跡見学」（同8）

35mm（24mm×36mm）フィルムネガファイル（DPEから渡される、フィルムシートをおりたたんだもの：以下同じ）で、2冊ある。ファイル内のメモは早川先生のもの、外部のタイトルは長谷部学氏の筆跡である、とのこと。3-1のフォトアルバムと共通する写真がある。撮影は早川先生。

3-9：タイトルのない35mmフィルムネガファイル（同9）

3-8と同一の棚に4冊みられた。「南山大学人類学考古学研究会」のスタンプ印がみられるものと、そうでないものがあるが、その内容は3-8同様、3-1のフォトアルバムと共通する写真があり、撮影も多くは早川先生の手によるものであろう、とのこと。

3-10：「伊藤」宛ての6×4.5判ブラウニーフィルムネガファイル2冊（同10）

早川先生はもっぱら6×6判ブラウニーフィルムでの撮影をおこなっていたので、早川以外の研究会メンバーによるものであろう、とのこと。内容は、長野県に旅行したときのものではないか、と思われるものが多数ある。

3-11：写真プリント多数

3-8～10と同一の棚に収められた写真プリント。内容から、「人類学考古学研究会」の活動をおさめたものではないか、とのこと。小林知生先生ゼミの英文テキストの複写プリント等もみられた。

3-12：篠東遺跡見学写真（同 12）

「昭和三十四年岡崎市小坂井町篠東遺跡
見学写真」と記された 35mm フィルムネ
ガファイル 1 冊。撮影は早川先生。後に発
掘調査がおこなわれ、報告書が刊行（中村
他 1968）されることになるが、それ以前
の研究会活動の際に撮ったものであろう、
とのこと。

4. 文化人類学研究会の活動に関する資料
（写真 4）

4-1：1969 年に開催された『人類展 東
ニューギニア編』のパンフレット
（写真 4-1）

編集責任者には後に中日新聞の記者と
なった岩田茂樹氏の名前がみられる。

4-2：1969 年発行の『考古学陳列室ケー
ス案内』（同 2）

当時図書館の 3 階にあった陳列室の案
内。『南山大学五十年史写真集』（南山大学
50 年史作成小委員会編 1999）にみられる
陳列室のケースの配置と一致していること
がうかがわれ、さらに詳細な展示内容を
知ることができる。当時の展示意図などが、
今後の研究対象になりうるであろう。

4-3：1972 年発行の『考古学陳列室ケー
ス案内』（同 3）

編集は「文化人類学研究会 考古学サー
クル」となっている。

4-4：1977 年発行の『南山大学人類学研
究所付属陳列室』パンフレット（同 4）
編集責任者の一人には愛知県埋蔵文化財

センター宮腰健司氏の名前がみられる。

4-5：『長良川流域調査シリーズ（昭和 37
～46 年）』南山大学人類学研究会考
古学サークル（同 5）

当館展示資料である「赤土坂遺跡」、「陽
徳寺遺跡」、「武芸八幡遺跡」、「恵日山遺
跡」、「岩井戸遺跡」、「衣岩遺跡」を含む長
良川の支流、板取川流域の発掘調査成果を
まとめたもの。陳列ケース見学の際の参考
にしてほしい旨、記されている。

4-6：『考古・ニューギニア展』チラシ
（同 6）

何年におこなわれたものかわからない
が、おそらく「文化人類学研究会」主催の
ものであろう、とのこと。

4-7：長良川流域調査に関わる資料 1（同 7）

『埋蔵文化財包蔵地カード』は記入され
たものと、未記入のものがある。その他、
「稲荷遺跡」と記された 35mm フィルム
ネガファイル 1 冊など、調査に関連した記
録類が一括してひとつの棚に収納されてい
た。同棚内に、研究会の活動記録が記され
たリーフレット類があり、「43 年度役員」
の中の会長には「森部 一」氏の名前がみ
られる。

4-8：岐阜県武儀郡武儀村八幡遺跡発掘調
査関連書類（同 8）

調査成果は雑誌『古代文化』誌上に報告
されている（市野他 1966）。小林知生先生
名での埋蔵物発見届や、文化財保護委員
会からの小林先生あての事務書類がみられ

た。これらから、調査が1963（昭和38）年におこなわれたことがわかる。遺物の保管先は南山大学人類学研究所となっている。発掘調査自体は研究会の学生主体でおこなわれた、とのこと。同一棚に35mmカラーライドが残っている。その中には、展示資料と同一のものとおぼしき土器片が映っているものがあり、精査が待たれる。

また、同じく同一棚にのこされた資料整理用と思われる台帳は、「第十回日本人類学会日本民族学協会連合大会」出席者名簿（資料2-3）の裏面を利用しているものだった。

4-9：感想ノート（同9）
陳列室におかれていたものと思われる。

4-10：岐阜県関市北野遺跡発掘調査に関する資料（同10）

「北野遺跡試掘」とタイトルがふされた図面の青焼など。図面に記された日付が「S.43.11.23~24」となっていることから、文化人類学研究会が参加したものか。関高校社研部、美濃考古学研究会の名も図面中にある。

4-11：長良川流域調査シリーズの展示説明図（同11）

大判の紙にマジックで書かれた展示説明図。4-5に関係するものかもしれない。

4-12：長良川流域調査に関わる資料2（同12）

昭和43年の長良川流域調査の調査カードや地形図、参考資料として用いたのか、美

濃市郷土史編集委員会編の『郷土読本美濃市の歴史』が一つの棚にまとめられていた。

5. 南山大学の研究者が中心となっておこなわれた発掘調査に関する資料（写真5）

5-1：『三重県尾鷲市曾根遺跡・愛知県豊田市市塚古墳』フォトアルバム（写真5-1）

アルバム内の写真はほぼすべてが早川先生の撮影によるもの。写真に付された手書きのキャプション等はすべて長谷部学氏のもの。

三重県尾鷲市曾根遺跡の調査は、昭和33~36年におこなわれた、中日新聞社主催の「伊勢湾周辺総合学術調査」（佐々木他1961）の一環としておこなわれたもので、名古屋大学との合同調査であった、とのこと。写真中には、名古屋大学出身で、当時は愛知学院大学に転出していた大参義一氏の姿もある。

5-2：「昭和三十四年三重県尾鷲市曾根発掘」と記された6×6判ブラウニーフィルムのネガファイル（同2）

2冊みられた。メモの筆跡は早川先生のもの。すべて早川撮影。35mmフィルムだけでなく、ブラウニーフィルムでの写真撮影も専ら早川先生がおこなっていた、とのこと。

5-3：写真ガラス乾板「チャンチャカヤマ古墳出土遺物」のメモあり（同3）
豊橋市チャンチャカヤマ古墳は東名高速

道路建設工事にともなって発掘調査をおこなった、とのこと。写真ガラス乾板撮影も早川先生がおこなった。

5-4：写真ガラス乾板「桜井町二子遺跡出土遺物木製品」のメモあり（同4）
チャンチャカヤマ古墳同様、東名高速道路建設工事にともなって発掘調査をおこなった、とのこと。両乾板は同一の箱に収められていた。

5-5：豊田市市塚古墳発掘調査関連資料（同5）

「昭和三十四年九月 古墳発掘日誌 市塚古墳発掘事務所」と記された発掘日誌や、作業員の勤務表、調査現場で用いられたであろう「係でない方は無断で古墳へ立ち入らぬように願います 発掘事務所」のサインなど。発掘期間中に伊勢湾台風に見舞われたことをよく覚えている、とのこと。35mm フィルムネガファイルも1冊みられた。

5-6：前畑遺跡発掘調査報告原稿（同6）

1968年に刊行された『矢作ダム水没地域埋蔵文化財調査報告』（吉田他1968）に所収の前畑遺跡調査報告の原稿。本文は原稿用紙にペンで記され、図の指定や校正の赤字が入っている。

5-7：「豊橋市嵩山」関連（同7）

「豊橋市嵩山 昭和35年八月」としてされた封筒の中に、洞穴の図面が数葉入っていた。作図者名には「小林知生・早川正一」の文字。当時、小林先生はヨーロッパにおける諸洞穴遺跡同様の壁画の発見を目

指した洞穴探索に熱心であった、とのこと。

5-8：矢作ダム関連発掘調査に関わる書類（同8）

「竜淵寺遺跡」、「牛池永原遺跡」、「生駒小学校北遺跡」、に関わる調査日誌、出土遺物台帳、出納帳、図面類。吉田章一郎先生名での、講義欠席願もみられた。これらから、調査が1967（昭和42）年におこなわれたことがわかる。

5-9：三重県四日市市東日野遺跡発掘調査に関する資料（同9）

35mm フィルムのネガファイル2冊の撮影はいずれも早川先生。その他、東日野遺跡発掘調査時のものとして間違いない写真プリントが数枚みられる。この調査は四日市市の団地開発にともなう発掘調査として行われ、三重大学との合同調査であった。三重大学側の教員は歴史教室の服部貞蔵先生、とのこと。調査の報告書は刊行されているが（小玉他1966）、三重大学歴史研究会古代史部会による『東日野弥生後期住居址発掘調査報告展』が1冊みられた。ガリ版刷りで、日付は「1967.11.2.3」とある。

5-10：三重県御座白浜遺跡発掘調査に関する資料（同10）

「昭和三十五年八月二十三日～二十八日 三重県志摩郡志摩町御座白濱遺跡」と記された35mm フィルムネガファイルが3冊。撮影は早川先生。ファイルには使用したカメラ・フィルム名も記されている。その他、35mm カラーフィルムスライドがみられた。この調査は5-1と同様に、中日新

聞社主催の「伊勢湾周辺総合学術調査」の一環としておこなわれた、とのこと。

5-11：愛知県一宮市尾張病院横遺跡発掘調査に関する資料（同 11）

「昭和三十四年愛知県一宮市尾張病院横遺跡」と記された 35mm フィルムネガファイルが 1 冊、「一宮市尾張病院横出土弥生式土器」と記された 35mm フィルムネガファイルが 3 冊。いずれも早川先生撮影。6×6 判ブラウニーフィルムの「尾張病院航空写真昭和 34 年撮影」というネガファイルもあるが、こちらについては記憶がない、とのこと。現在では弥生後期の土器型式である「山中式」の標識遺跡として知られており、調査成果は『愛知県一宮市萩原町の弥生文化遺跡』（吉田編 1960）に収められている。

5-12：中津川古窯址発掘調査に関わる資料（同 12）

「33.5.28～31 中津川古窯址発掘スナップ」と記された 35mm フィルムネガファイルをはじめとして計 5 冊のネガファイルがみられた。その他、写真ガラス乾板もみられた。写真撮影はすべて早川先生。この調査には、南山大学をはじめとして、名古屋大学の榑崎彰一先生や、東京大学の大学院生も参加した、とのこと。

5-13：岐阜県丹生川村根方岩陰発掘調査に関わる資料（同 13）

35mm フィルムネガファイルが 4 冊、35mm カラーライドが 2 箱、いずれも撮影は早川先生。そのほか台帳類などの書類が封筒に収められている。

1963 年におこなわれた発掘調査で、日本考古学協会洞穴調査委員会編『日本の洞穴遺跡』所収の報告（小林他 1967a）に概要が記されている。

5-14：愛知県豊川市念仏塚第 3 号古墳発掘調査に関する資料（同 14）

日誌が 1 冊、35mm フィルムネガファイルが 4 冊みられた。写真の撮影は早川先生。

調査は日誌タイトルにあるように、東名高速道路建設による土取りに伴いおこなわれた。早川先生は下層等で発見された旧石器資料の調査研究を中心におこなった。その報告（小林・早川 1967）の原稿もみられた。

5-15：愛知県渥美町保美貝塚発掘調査に関する資料（同 15）

日誌 1 冊、35mm フィルムネガファイル 2 冊。写真の撮影は早川先生。ネガファイルに記された日付は「昭和 40 年 8 月 5～11 日」、その他図面類が封筒に収められている。

5-16：愛知県豊川市三河国分尼寺発掘調査に関する資料（同 16）

「三河国分尼寺発掘日誌」1 冊のほか、発掘調査の際の参考資料として、「三河国分尼寺発掘調査の栞」が用いられており、それもみられた。また、「昭和 42 年 9 月 豊川南中 鈴木範一」による「三河国分尼寺緊急発掘ノート」もみられた。その他図面類がみられた。

5-17：豊田市神明遺跡発掘調査に関する資料（同 17）

図面類、出納帳などの事務書類のほか、手書きの調査団の出欠表がある。出欠表からは南山・上智・大阪市立大学の学生が参加していたことがわかる。当時大阪市立大学の学生であり、のちに京都外語大学教授となった大井邦明氏の名前もみられる。

5-18：愛知県宝飯郡一宮町日吉原遺跡発掘調査に関する資料（同 18）

図面類のほか、発掘日誌が 1 枚だけ離れた形でみられた。昭和 37 年 8 月の調査であることがわかり、その日誌の筆跡は長谷部学氏のものと思われる、とのことである。

5-19：愛知県佐久島における発掘調査に関する資料（同 19）

埋蔵物発見届・埋蔵文化財保管証の下書き？や図面類。図面のひとつには、1966 年 12 月 23～24 日との日付がみられる。ユースホテル下に横穴式石室があることがわかり、そのことが調査のきっかけだった、とのこと。

おわりに—今後の課題—

これらの資料群に関する今後の課題は、保存環境の改善とその精査、加えて「はじめに」で挙げた予想される活用形態 a)、b)、c) を進展させることであり、それぞれについて多岐にわたる。

まず、現在の資料の状態は非常に良くない。わら半紙やガリ版刷りの紙資料、写真フィルム・乾板が多く、保存環境の改善が

必要である。

環境改善を含む収蔵方法変更の前提として、資料群のさらなる精査が必要と考えられる。その結果によっては、本稿の便宜的な分類も見直さなければならなくなるだろう。本資料群の特徴は、多数の写真のほとんどが早川正一先生の撮影、ということである。その形態はネガやプリント、ガラス乾板であり、例えばデジタルスキャナを用いてある程度の解像度でスキャンし、写真群を一覧しやすいようにすれば、それをもとにさらなるインタビューをおこなうことが可能と考えられる。

これらの課題解決の先に、冒頭に挙げた、a) 当館所蔵資料の周辺情報を充実させる、b) 東海地方における、現在は消滅してしまった諸遺跡の周辺情報を充実させる、c) いわゆる「研究の研究」の進展に寄与する、という活用形態三者の進展が期待される。これらはさらに多くの情報提供者や研究者の協力を必要とすることから、資料群を契機とした各種コミュニケーション生成の場として博物館が機能することも、期待されることのひとつであり、課題とも言える。

謝辞

インタビューに応じていただき、懇切丁寧な種々御教示いただいた、早川正一先生に深謝の意を表します。

参考文献目録（アルファベット順）

- 愛知県幡豆郡一色町. 1967. 佐久島の古墳—一色町誌資料第 1 輯—. 一色町誌編纂委員会：愛知県一色町
- 安藤義弘・松原隆治・伊藤秋男. 2007. 中山

英司と愛知の遺跡. 伊藤秋男先生古稀記念論集. pp.383-536. 同刊行会・名古屋

市野哲哉・杉浦昭夫・早川正一. 1966. 岐阜県武芸八幡遺跡の発掘調査—第一回長良川流域調査シリーズ—. 古代文化. 16-5. pp.116-126. 古代学協会：京都

小玉道明・他. 1966. 四日市市埋蔵文化財調査報告第1集—東日野弥生住居址群・岡山古窯址群第1号窯—. 四日市市教育委員会・四日市遺跡を守る会：四日市

小林知生・他. 1966. 保美貝塚—渥美町史資料第2輯—. 愛知県渥美郡渥美町教育委員会：愛知県渥美町

——・他. 1967a. 根方岩陰. 日本の洞穴遺跡. pp.175-188. 日本考古学協会洞穴調査委員会：東京

——・他. 1967b. 神明遺跡. 東名高速道路関係埋蔵文化財調査報告. pp.1-36. 愛知県教育委員会：名古屋

小林知生・早川正一. 1967. 念仏塚第3号墳発見の石器について. 東名高速道路関係埋蔵文化財調査報告. pp.116-121. 愛知県教育委員会：名古屋

守屋幸一編. 2005. 夢を掘った少年たち. 板橋区立郷土資料館：東京

永井英治. 2007. 学会アーカイブズという課題. 名古屋大学文書資料室紀要. 15. pp.45-69. 名古屋大学文書資料室：名古屋

中村文哉・他. 1968. 篠東. 愛知県小坂井町教育委員会：愛知県小坂井町

中山英司編. 1955. 入海貝塚. 愛知県知多郡東浦町文化財保存会：愛知県東浦町

南山大学50年史作成小委員会編. 1999. 南山大学五十年史写真集. 南山大学：名古屋

坂井忠夫・吉田英敏他. 1970. 富加村の古墳.

富加村教育委員会：岐阜県富加村

佐々木宣明・伊藤秋男・早川正一. 1961. 考古編. 伊勢湾をめぐる文化史. pp.22-37. 中部日本新聞社：名古屋

吉田章一郎編. 1960. 愛知県一宮市萩原町の弥生文化遺跡. 愛知県教育委員会：名古屋

——・他. 1967. 念仏塚第3号墳. 東名高速道路関係埋蔵文化財調査報告. pp.104-108. 愛知県教育委員会：名古屋

——・他. 1968. 前畑遺跡. 矢作ダム水没地域埋蔵文化財調査報告. pp.50-66. 愛知県教育委員会：名古屋

附記：第一展示室展示アルバム作成メモ追記

記録類とそれらへのアクセスを容易にするアーカイブ化の重要性は、当館展示資料調査でも同様である。

展示室においてひときわ目立つ丸木舟の出土地は、近年のスタッフの間では不明になっていたが、千葉県印旛郡阿蘇村神野（現：八千代市）の可能性が高い、との領塚正浩氏の書簡が存在していた。こうした日本考古学研究所で所蔵していた資料の調査は断続的に進められていたようであり、この種の調査の記録やメモ類の体系的な整理も、同様の考古資料を多く抱える当館に固有の課題と言えそうである。

また、前号（当館紀要第26号）で文献にみる元刈谷貝塚出土牙製勾玉と酷似する製品（写真6）について記したが、刈谷市教育委員会の鶴飼堅証氏より、文献にみる牙製勾玉は刈谷市で確かに所蔵している、との御教示をうけた。資料にはかすかに「ホビ」とも読める朱書があるので、同製

品は保美貝塚出土のものであろう。動物の同一部位を利用し、そのサイズに穿孔個所も規制をうけるため、酷似する資料となったとするのが妥当であろう。今後は、両遺

跡で同一部位を利用すること自体の背景や、意味を考察することが求められる。

(南山大学人類学博物館特別嘱託職員)

**Building up Archives for ‘Studies of Archaeological Study’
Appendix: Supplement to ‘Compiling a Photographic List of
Archaeological Exhibits’**

YOSHIDA Yasuyuki

There remain several materials on the archaeological study collected and/or composed by the staff of the Anthropological Institute of Nanzan University (the former organization), or by students who were acting in the Society for the Study of Cultural Anthropology. Since the staff of our museum has been frequently changed and therefore the information was sometimes to be lost, it is now difficult to estimate the value of such materials.

This report, based on the interview with Professor Emeritus Shoichi Hayakawa, informs each material in order to build new archives for ‘studies of archaeological study’, hoping that we will contribute to further investigations.



写真1 人類学民族学研究所関連資料



写真2 日本人類学会日本民族学協会連合大会関連資料



写真3 人類学考古学研究会関連資料



写真4 文化人類学研究会関連資料



写真5 発掘調査に関する資料



写真6 附記関連資料

平成 21 年 3 月 18 日 印刷

平成 21 年 3 月 24 日 発行

南山大学人類学博物館紀要 第 27 号

編集・発行人 南山大学人類学博物館

466-8673 名古屋市昭和区山里町 18

TEL 052(832)3111 (代表)

印刷 株式会社クイックス

456-0004 名古屋市熱田区桜田町 19-20

TEL 052(871)9190